

---

# 路地裏の人形劇

日向 銀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

路地裏の人形劇

### 【Nコード】

N5910D

### 【作者名】

日向 銀

### 【あらすじ】

誰もが目を背ける場所。華やかな街並みから一変、少し路地に入ればそこは、孤児の子供たちが住む世界だった。これは世間に見捨てられたある2人の物語。タイトルからして、ホラーみたいです。が、ホラー要素は一切ありません。

いつからだっただろうか。  
自分の事を嫌いになったのは。

綺麗な町並みの一角にある汚い路地裏。

そこは昼なのに薄暗く、じめじめと湿っぽい。  
人が寄り付くわけのないその場所に住み着いた子ども達。  
そのうちの1人が、この俺。

「俺とか言っふなよ」

薄汚れたゴミバケツの上に座り、それにもたれかかっていた俺の頭  
を拳で殴りつける、ルキ。

茶色がかった長めの髪を片手でいじりながら、ルキを怪訝な目で見  
つめ、俺は立ち上がった。

「俺って言って何が悪いんだよ」

口を尖らせれば、ルキは困ったように顔を歪めた。

「少なくとも、ミケ、お前は女だろう」

「男も女も関係あるか！俺は俺だ」

ルキは呆れたようにため息をつき、そうだなと呟いた。  
そして空を仰いで立ち上がる。

ルキの漆黒の短髪が、風に小さく揺れた。

空と言っても建物の影になっているここに、青い空など無いのだけ

れど。

「ルキ、行くのか？」

汚い路地を抜け出し、眩しい通りを風のように駆け、獲物を盗る。そうして、俺やルキ、ここに住む仲間たちは生き延びてきた。

「ミケ、俺たちが何て呼ばれているか、知ってるか？」

俺に背を向けたまま、ルキが言った。

少し考えて、俺は首を横に振る。

別に知りたくもないし、そう言えばルキはまた困った顔をするだろうなどと考えながら。

「人形だよ」

「に、んぎょう？」

り返り笑った顔は思わず目を反らしたくなるような、悲しい笑顔だった。

「俺たち心が無いんだって」

それだけ言い残して、彼は消えた。

あまりの速さに、俺の目はずいていけなかった。きつと、獲物の調達だろう。

俺は寢床に帰るために、塀に飛び乗った。

昔のルキはあんなに楽しそうに笑ったのに。

その夜のことだ。

いつもなら帰る時間なのに、ルキはまだ寢床に帰って来てはいなかった。

俺は心配になり、夜の街をさまよった。

「ルキーーーーっ！」

うるさいと怒鳴られ、野次られ、殴られかけても、叫ぶ事をやめようとはしない。

ルキはもしかしたら…。

嫌な汗が全身から吹き出る。

震える足、軋む心。

走りまわり力つきた俺は、ルキが帰ってきている事を願いながら寢床に戻った。

だかそこに、やはりルキの姿は無かった。

倒れ込むようにボロボロの布の上で横になる。

仲間たちが声をかけてくれているが、俺は顔を布にうめた。

ルキ、ルキ……どこ行っちゃったんだよ。

夜の闇を、俺は初めて怖いと思った。

小鳥が遠くで鳴く声がする。

こんな場所にも、朝はやってくるのだ。

「ルキ…？」

いつの間にか寝ていたらしい。

俺は体を起こすと、目をこすった。

あたりはうつすらと明るく、朝だということを物語っている。そう、最初俺はそう思った。

「なんだ、この暑さは」

熱気が充満している、煙が立ち込める、紅い炎の世界。

「まさか、嘘だろ？」

俺の周りはすでに炎に包まれていた。  
はっと思い出す。

街の連中の会話を。

燃やすのか、あの路地を。

ええ、みすばらしいですもの。

子ども達はどうなる？

生きるか、死ぬかでしょう。

「そっか、燃やされたんだ」

出来の悪い人形を捨てたんだ。

例えば、俺みたいな。

ルキは大丈夫かな。

涙が流れるはずもなく、俺はただ立ち尽くした。

嫌悪感を抱きもせず、ただルキの身を案じる。

結局帰っては来なかったルキ。

「ルキにまで見捨てられたかな」

「誰が誰を見捨てたって？」

渴ききつた心に1滴水が落とされる。

「ルキ！！」

気がつけば俺はルキに抱きついていていた。

今なら死んだって良いとまで思えるほど、嬉しかった。

「ああ、良かった、ほんとに！死んじまったかと思ってたよ」

「ミケを置いては死ねないからな」

楽しそうに笑うルキは、昔の笑顔を取り戻していた。

この炎の世界の中で。

俺は慌ててルキから離れた。

眉をひそめてルキを見やると、彼は頷き俺の手をとった。

「大丈夫、こつちだ」

炎をも切り裂くように、見慣れた路地裏を駆け抜けた。

ゴミだらけの床を力強く蹴り、荒い息をさらに荒くして。

光だ、ルキ、光だよ。

パツと開けたそこには、仲間たちが待っていた。

そこは明るい街から少し離れた、ある店の裏だった。

その場にへたり込んだ俺を見て、ルキが声をだして笑う。

「情けないぞ」

「う、うるさい！俺が昨日どれだけ…」

俺が罵声を浴びせてやろうと口を開くと、ルキは店の中へと入って行った。

「あ、おい！ルキ！」

店に入る、それ即ち盗みに入るということで。

そんな行為を逃げ場の無い今、堂々とやるなんて。

俺が立ち上がろうとすると、ルキは店から出てきた。手にはたくさんの花を持って。

「悪かったな、ミケ」

「な、何が？」

「昨日はここで働いてた。誰にも心がないなんて言わせない。これ、お前にやりたかったんだ」

ルキは花束を俺の前に突き出した。

言葉につまった俺を見て再び笑うと、しゃがんで視線をあわせる。

「これからは、堂々と生きよう。この店で、ミケと仲間たちと一緒に」

「ルキ…わ、わたし」

「良いんだ“俺”で。それがお前だろう？」



俺が笑顔になるのを見届けて、ルキは強く俺を抱きしめた。  
途端に頬が熱っぽくなる。

仲間たちが冷やかしの声をかけ、俺はさらに恥ずかしくなった。

「俺たちはずっと一緒だよミケ。愛してる」

「なっ！ばっ、何言っただよルキ！」

俺はまるでりんごのようになった顔を隠すように、俯いたままルキの肩を突き飛ばす。

ルキは不服そうに眉をよせた。

「何だよ、嫌なのか？」

「そ、そういうわけじゃないけど……でもっ」

「じゃあ、良いだろ。幸せにしてやるよ」

ルキが優しく微笑んで、俺の頭を撫でた。  
何か、俺1人だけ馬鹿みたいじゃないか。

ふつつと込み上げるわけの分からない怒りを、キッとルキにむけた。

「ルキ！……大好きだバカ！」

「まったく…、照れちゃって」

そう言っただけルキは、再び俺を抱きしめてくれた。

青い空はやっぱりあった方が良い。  
ちゃんとした世間の居場所だっただった方が良い。  
仲間たちだっただってほしい。

でもこいつだけは、隣に絶対必要なんだ。  
でなきゃ、俺は死んでしまう。

こいつ無しでは生きてはいけない。

大事な大事な人だから。

（後書き）

勢いで書き上げてしまった作品なので、荒々しかったり、ルキとミケの口調の区別がつかなかったり、店が謎だったり、もうめっちゃめっちゃですが、とにかく！

死に間際に現れる救世主。

昔から懂れています。

私には珍しく、少しシリアスを入れたかなあと。  
本当に自己満足ですが。

感想、ご指摘等々、  
どうかよろしくお願いします。

日々精進！

日向 銀

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5910d/>

---

路地裏の人形劇

2011年1月27日08時31分発行